



えんのおづめ
法務課 五頭 覚玄

前回は修験道の開祖である役小角について、主に『続日本紀』を参考に書かせていただきました。役小角とは、修験道の始祖として仮託された伝説上の人物であり、神変大菩薩や役行者とも呼ばれた人物であります。

今回は『日本霊異記』を基に、役小角の出生を紹介していきたいと思えます。まず、『日本霊異記』とは弘仁年間（八一〇〜八二四）に成立し、薬師寺の僧、景戒によって書かれた日本最初の仏教説話集であります。役小角の出生に関する記述は、『日本霊異記』上巻、第二十八に「役優婆塞は、賀茂役公、今の高賀茂朝臣という者なり、大和国葛木上郡茅原村の人なり。」（『新日本古典文学大系』

三十『日本霊異記』pp.41-42）と記されており、このことからわかるように、役小角は葛城郡茅原村の人物であり、葛城の地を本拠とした賀茂氏の役公とされており、また、この「役」という言葉は当時の律令制度下における歳役・雑徭をさす言葉とされており、それゆえ「役公」とは、賀茂宗家に仕えていた家であると考えられます。そして、役小角の事を役優婆塞と表現していることから在家の仏教者であったことがわかります。この『日本霊異記』の続きを要約いたしますと次のようになります。「役優婆塞は生まれつき賢く、博学の面に関しては、郷里では右に出る者は居なかった。また、

三宝（仏・法・僧）を信仰していた。いつも、願っていたことは、五色の雲に乗って天空に行き、仙人の永遠の世界で体力や気力を養うために霞を吸いたいということであった。そのため、巖窟で修行をし、葛を身に付け衣とし、松を食し、清水の泉に入っては、欲の世界で汚れた垢をすすぎ落していた。その後、『孔雀明王の呪法』を修得し、験力を得、鬼神を自由自在に操ることができた。役優婆塞は多くの鬼神を集め、大和国の金峰と葛城の峰に橋を架け渡すように命じたが、葛城山の一言主神だけが、自分の顔が醜く昼は仕事ができないと反発した。そこで、人へ乗り移って『役優婆塞が天皇を滅ぼそうとしている』と嘘の報告をし、その報告を受けた文武天皇は役優婆塞を捕えようとしたが、験力があるので、捕まえることが出来ず、役優婆塞の母親を捕まえた。役優婆塞は母親を赦免してもらおうために出頭し、伊豆大島へ島流しにされた。役優婆塞は、日中は天皇の命に従い、島に留まっていたが、夜になると空を飛び、富士山で修行をしていた。その後、三年間伊豆大島にいたが、大宝元年（七〇二）になつて、天皇の許しを得て仙人となつて天に飛び去って行った。また、法相宗の開祖であった道昭は、五百の虎から請いを受け、新羅の国に行き、『法華経』の講義を行った。その中の一頭の虎が、日本語で質問をした。道昭は「誰ですか」と聞くと、「役優婆塞である」と答えた。道昭は日本の聖人であると思い、高座から下りられ、その虎を捜したが、すでにいなくなっていた。その後、嘘の報告をした一言主神は、役優婆塞に呪縛され、今もまだ呪縛を解いて脱することができていない。

以上が、役小角について初めて書かれた説話の要約であります。『日本霊異記』で、役小角の呪法が「孔雀明王の呪法」と初めて記されており、これは毒蛇の猛毒をはじめ、諸病や貪瞋癡の三毒も含めた毒を消除し、さらに天変、怪異、病惱、出産をもたらすとして重用されていた呪法です。

前回書かせていただいた『続日本紀』との大きな違いは、役小角を始んで嘘の報告をした韓国連広足の話は一切出て来ず、代わりに葛城山の一言主神が嘘の報告をしたとなっております。この一言主神が後の説話や物語に登場します。

この『日本霊異記』にある説話は、『続日本紀』の記事と共にその後の説話や物語の基の話になる書物であります。次回も役小角に関する書物を紹介したいと思います。

おはなし散歩道

嵐のあとに

八王子市 池田美絵

季節外れの嵐が、森を襲いました。枝葉は激しく揺れ、風はうなり、一羽のひよどりが必死に枝にしがみつきました。このひよどりは群れとはぐれ、この森にたった一羽でくらししていたのです。嵐は未明に森を駆け抜け、高くそびえた木々の上で細い月が上がりました。ひよどりはふーっと安心のためいきをつきました。すると、妙なものを発見しました。かすかな月明かりでしたが、木々のあいまに岩のように大きなものがあります。それを確かめなければこわくて眠れないと思ひ、ひよどりは勇気を出して近づいていきました。近くで見ると、表面はざらざらとしてこまかいしわがよっています。なんだか不思議な生き物

……ひよどりが観察していると、だんだんと東の空が紫色に染まってきました。夜明けが近くなつてこまかなところまで見えてきました。「あら」。ひよどりは、声をあげました。森のなかでうずくまっていたのは子どものゾウだったのです。なぜここに？ひよどりは声をかけずにはいられませんでした。「きみ、どうしたの？」。するとゾウはつむつていた目をあけて、ぼろぼろと涙をこぼしはじめました。「さっきの嵐で、ぼくがいたおうちがこわれたの。こわくなって夢中でかへだしたらここにいたの」。「それは、心細かったでしょう」ひよどりもまだ子どもでしたが、お兄ちゃんぶつた口調でなぐさめました。ひよどりにはひとりぼっちの不安がわかる気がしたのです。

この森のとなりには動物園があります。正確には、森の一部を切り開いて動物園にしたのです。ひよどりは、動物園に小さなゾウがいたことを思い出しました。「心配しないで。朝になつたらぼくが送つてあげるから」。そして、ゾウが寂しくならないようにお父さんやお母さんのことをきいたり、ひよどりも森でのくらしを語って明るくなるまで待ちました。気がつくくと、ひよどりとゾウは、ずっと前から友達であつたようにうちとけあつていました。森にいくすじもの光がさしこんできました。朝です。せつかく会えたのに、別れるなんて寂しい。ひよどりに、こんな気持ちかわいてきました。でも、別れの時間はせまつてきます。「そろそろいこうか！」とゾウに声をかけました。大きな声を出したのは、さみしい気持ちを断ち切るためでもありました。するとゾウは、ひよどりの気持ちを見通すようにいきました。「これでさよならなんていやだ！」。その言葉をきいて、ひよどりもがまんしていた涙がこぼれました。「また、あそびたい」。「もちろんだよ！」。ひよどりとゾウはにっこり笑いました。ひよどりは、元気よく翼をはためかせ、ゾウを動物園まで案内しました。こわれた塀のところまでくると、ひよどりは、「またね！」と思い切り明るい声でさえずりました。ゾウは長い鼻をふつてパバイしました。（さし絵・小出 茂）

